新型コロナウイルス感染症対策特集

愛媛県全体の問題として、当院に与えられた使命を全うする

血液・免疫・感染症内科学講座　准教授　末盛浩一郎
呼吸器センター　講師　濱口直彦
看護部集中治療部2　看護師長　竹森香織

● 対策・治療におけるポジション・役割は?

末盛／感染症内科として抗ウイルス薬（ファビピラビルやレムデシビルなど）の導入および使用、そしてコロナの検査を担当し、またコロナ病棟であるICU2の感染対策にも従事しました。

濱口／私たち呼吸器内科、感染症内科と救急科の先生方で情報共有し、院内の治療方針を考え決定しています。

竹森／私は看護師長という立場で様々なチームをICU2内で繋ぐ役割でした。最初は、37名の看護師でしたが、コロナ対応病棟には部署を越えての応援があり、最大53名の看護チームとなりました。

● 対策・診療における大学病院ならではの特徴は?

濱口／ウイルス感染には抗ウイルス薬を使い、ステロイド治療はしないという世界的スタンダードがありました。しかし、当初からCTでは間質性肺炎の所見があり、炎症を抑える薬の使用が不可欠でした。

末盛／第1波時のWHO暫定ガイドラインではステロイドの使用は否定的でした。しかし、濱口先生のご専門である間質性肺炎からARDS（急性呼吸不全）で致死的となる症例もあり、私も感染症・膠原病の診療経験から、ステロイドが必要という共通認識がありました。

濱口／特に重症の方は急性肺炎が進んでいることからステロイドパルス治療という、数日間のステロイド点滴を行う治療も取り入れました。当院の重症患者さんの救命率が約8割5分～9割。この判断でよかったと思います。

末盛／24時間体制の救急部の先生方の熱心な全身管理と看護師の方々のケアも非常に大きかったと思います。

● 看護部の対策や治療についての状況は?

竹森／最初は未知のウイルスに誰もが不安を抱きました。「COVIDチームだよ」という先生方の声掛けや、事務方も含めた病院全体からの支援で、使命感をもって看護ができました。一つ一つをポジティブなやりがいとして捉えながら取り組みました。また、不安やストレスを都度現場で解消し、素直に「しんどい」と伝えられる雰囲気となるよう、チームで支え合いました。

濱口／コロナ前のICU運営と全く違って相当不慣れな中、私たちがやらないといけないという心意気でされているのが印象的でした。

竹森／丁寧な面接や声かけで不安を拾い上げ、機器購入による負担軽減や細やかなシフト調整も積極的に行いました。患者さんが回復し、元気に退院される時が最も充実感を感じます。

● 今後の対応については?

濱口／仮にインフルエンザの症状に近くなっていくとすると、二次感染としての細菌感染症の可能性や既往症がある方の増悪（より悪化すること）になる可能性も踏まえて、対応を行います。

竹森／基本に忠実な対応を心がけ、大事な時に力が発揮できるように、今できることを落ち着いて行います。これまでの経験と、知識を活かした備えがあるので、私たちならできる、と皆にも伝えています。

末盛／呼吸器内科と救急部と引き続き連携し、ウイルス変異による病態の変化に合わせて対応します。コロナは愛媛県全体の問題でもあり、私達が重症コロナ患者さんに対応することで県内の一般医療維持の両立に貢献できれば幸いです。

PROFILE
すえもりこういちろう◎2002年愛媛大学医学部卒業後、血液・免疫・感染症内科学（第一内科）入局。2021年5月から現職。専門は感染症・感染制御、膠原病。日本感染症学会専門医・指導医、インフェクションコントロールドクター、日本リウマチ学会専門医・指導医。

PROFILE
はまぐちなおひこ◎2001年愛媛大学医学部卒業。愛媛県内外の病院での研鑽を経て2017年4月から現職。専門は呼吸器疾患全般。日本呼吸器学会専門医・指導医、日本内科学会認定医・総合内科専門医・指導医。趣味はソフトテニス。

PROFILE
たけもりかおり◎1993年新見女子短期大学（現：新見公立大学）卒業。同年から当院勤務。2006年救急看護認定看護師資格取得、翌年DMAT隊員研修修了。ICU、整形外科、ICU2/HCU、肝胆膵移植乳腺外科を経て、2015年4月から現職。趣味はイヌ。